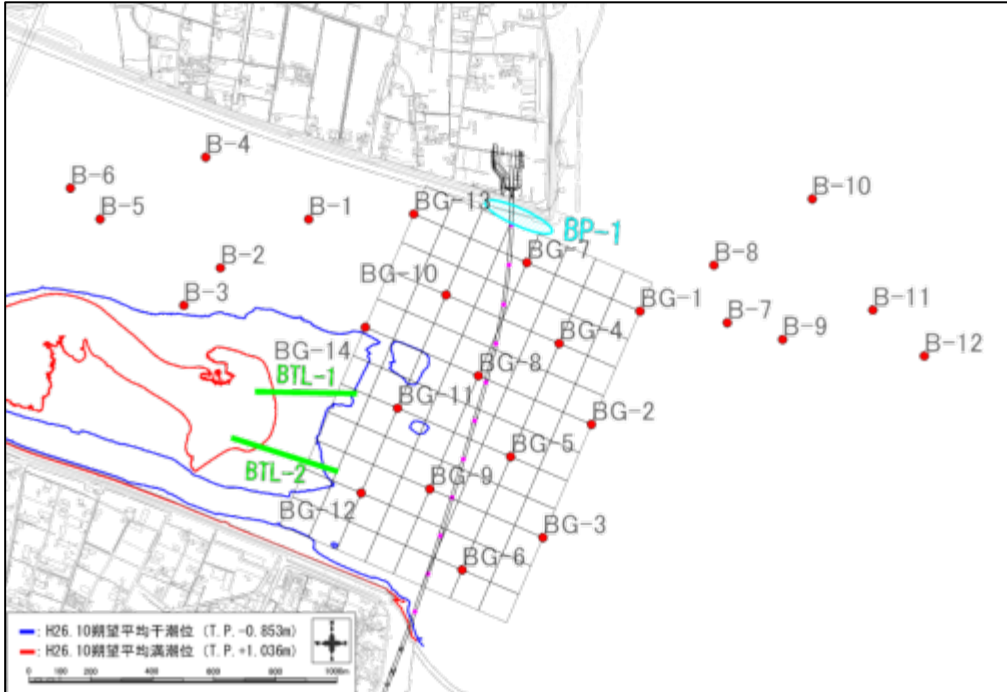


④底生生物・底質調査（速報）

■調査範囲



■調査実施日

[H26.10調査]

潮下帯定量調査

平成26年10月9日～11日,21日

潮間帯定量調査

平成26年10月9日

付着生物調査

平成26年10月21日

[H27.6調査]

潮下帯定量調査

平成27年6月1日～3日

潮間帯定量調査

平成27年6月2日

付着生物調査

平成27年6月1日

■第5回環境部会(H27.2.24)で報告した内容

[潮下帯定量調査]

- ・ 格子内・外の現状把握に必要な底質調査が、調査ポイントを含め適切に実施できたものと考えられる。
- ・ 全体的に底質環境は砂質であり、砂質に生息する底生動物が多い傾向が確認された。
- ・ 調査時期の違いや出水による影響があるものの、河口域の底生動物の生物相は攪乱による入れ替わりが激しい可能性があると考えられる。

[潮間帯定量調査]

- ・ 平成26年8月の大出水によって河口干潟が攪乱されたことにより、底生動物が少ないと考えられる。

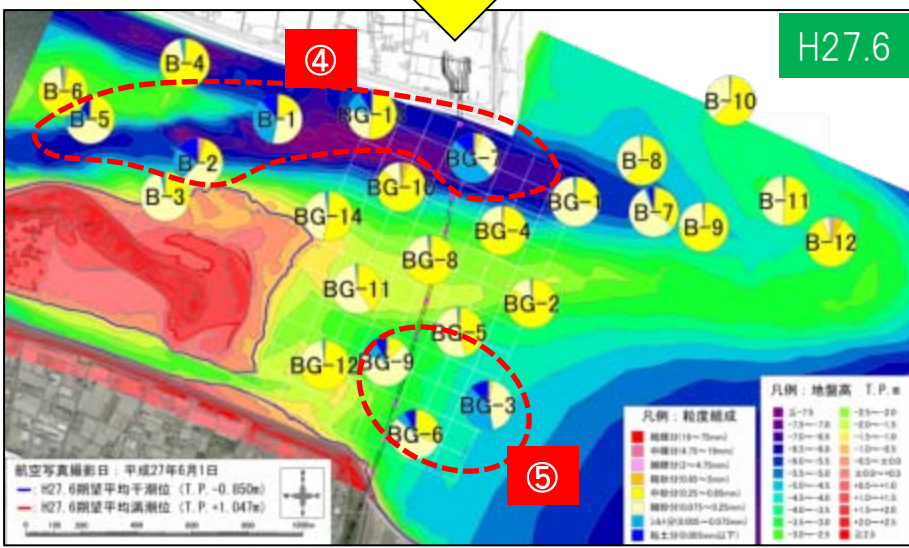
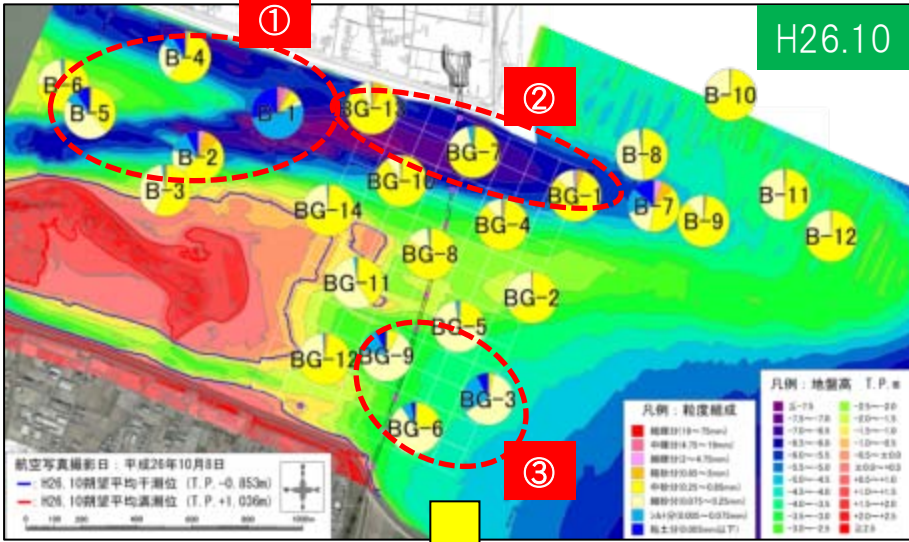
[付着生物調査]

- ・ 海面付近は植物の被度が高く、2m以深では動物の被度が高い。

■底生生物・底質調査の結果(速報) ～潮下帯定量調査(底質)の調査結果～



潮下帯定量調査(底質)の結果を以下に示す。



- 平成26年10月調査
- ①格子外の左岸側みお筋では、水深が深く、シルト・粘土分の多い土砂が堆積し、有機物や全窒素・全リンが高い傾向にある。
- ②格子上の左岸側みお筋では、水深が深いもののシルト・粘土分が少なく、有機物や硫化物の値が低い傾向にある。
- ③右岸側の計画線付近～沖合では、左岸みお筋ほどではないものの、シルト・粘土分を含む底質が堆積し、有機物や全窒素・全リンが高い傾向にある。

- 平成27年6月調査
- ④格子上・格子外ともに、左岸側みお筋では水深が深く、シルト・粘土分の多い土砂が堆積し、有機物や全窒素・全リンが高い傾向にある。
- ⑤右岸側の計画線付近～沖合では、左岸みお筋ほどではないものの、シルト・粘土分を含む底質が堆積し、有機物や全窒素・全リンが高い傾向にある。 ※10月調査と同様

調査の結果、左岸みお筋の底質は出水後(10月)に砂質、濁水期を経た出水前(6月)は泥混じりになり、その他の地点と比較して底質環境が変化しやすいことが確認された。



■底生生物・底質調査の結果(速報) ～潮下帯定量調査(底質)の調査結果～



吉野川渡河部周辺の底質環境を以下に示す。

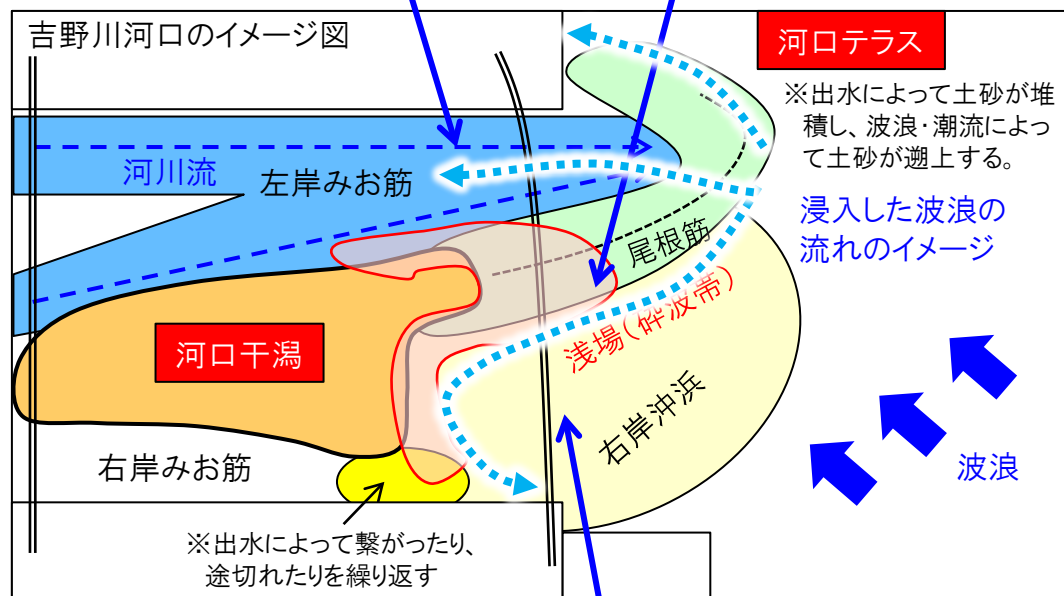
■①左岸みお筋

出水前(6月)は、冬場の濁水期に泥質が徐々に堆積し、出水によって泥質が流出または砂が堆積して砂質に変化(10月)する環境であると考えられる。

⇒※左岸みお筋は、底質が変化しやすい環境

■②渡河部全体

全体的に底質は砂質で安定しているが、水深の違いで波浪による攪乱強度に差があると考えられる。
⇒※浅いと波浪の影響が大きくなる。



■③渡河部右岸側

安定的に泥混じりの砂質が堆積している環境と考えられる。

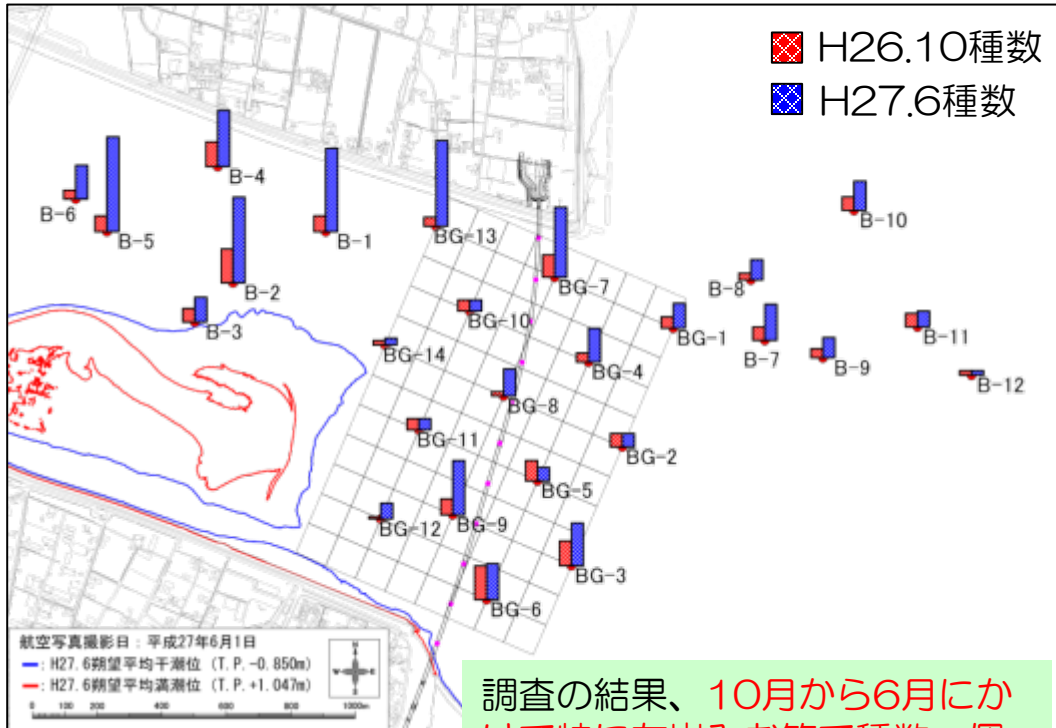
■底生生物・底質調査の結果(速報) ～潮下帯定量調査(底生動物)の調査結果～



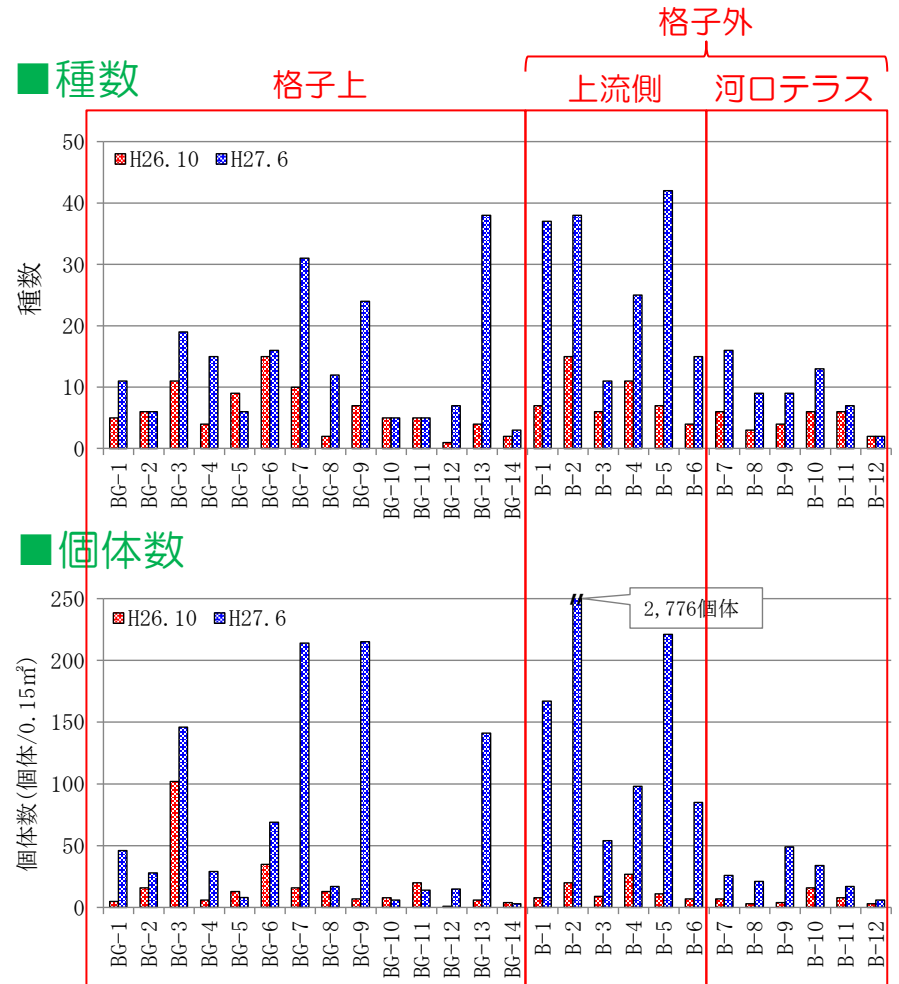
潮下帯定量調査(底生動物)の結果を以下に示す。

- ①H26.10調査では、**71種**(軟体動物門17、環形動物門19、節足動物門30、その他5)の底生動物が確認された。
- ②H27.6調査では、**135種**(軟体動物門41、環形動物門51、節足動物門30、その他13)の底生動物が確認された。
- ③6月と10月を比較すると、**6月の方が底生動物の種数、個体数が豊富**であることが確認された。

■種数の分布図



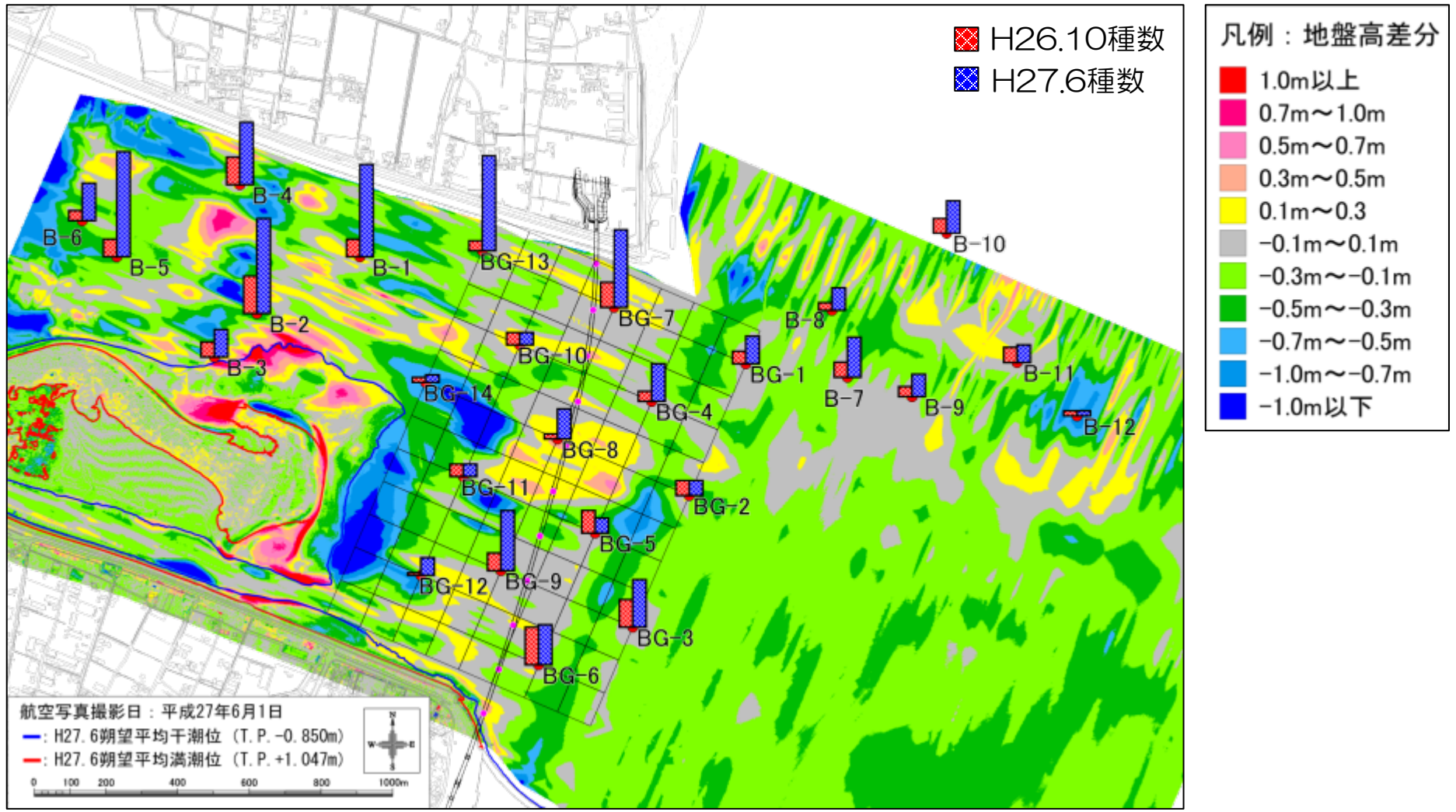
調査の結果、10月から6月にかけて特に左岸みお筋で種数・個体数が大きく増加したことが確認された。これは出水後(10月)は底生動物が流出し、濁水期を経た出水前(6月)までに新たに加入したためと考えられる。



■底生生物・底質調査の結果(速報) ～潮下帯定量調査(底生動物)の調査結果～



参考に、地形調査で把握した平成26年10月から平成27年6月にかけての地形差分図に、種数の分布を重ねて示す。



■底生生物・底質調査の結果(速報) ～潮下帯定量調査(底生動物)の調査結果～



潮下帯定量調査(底生動物)の結果を以下に示す。

- ①H25.6に実施した予備調査と、以降の事前調査で確認された底生動物は全193種が確認された。
 - ②この全193種のうち、3回の調査で共通する種は28種、先行事例で確認された種は141種、渡河部周辺の格子上のみで確認された種は24種であった。
- ⇒河口周辺の底生動物の生物相は、出水等の攪乱によって入れ替わりが激しい可能性があると考えられる。

項目	予備調査 ※11地点	事前調査 ※26地点		予備・事前 統合※3
	H25.6	H26.10	H27.6	
①確認種数	92	71	135	193 ※うち共通する種は28種
②格子上で確認された種数	92※1	21	39	71
③格子外で確認された種数	—	28	39	40
④格子上・外の両方で確認された種数	—	22	57	82
⑤先行事例※2で確認された種数	66	56	106	141
⑥格子上で確認された種のうち、 先行事例でも未確認であった種数※4	26	4	9	24

※1：予備調査は、計画線上の調査であることから格子上のデータとした。
 ※2：先行事例は、阿波しらさぎ大橋整備事業において平成15～23年度に実施された底生生物調査を指す。
 ※3：予備調査と事前調査を統合した種数は、各調査で重複する種が複数あるため、単純な足し算にはならない。
 ※4：⑥は、全調査+先行事例で確認された種のうち、渡河部の格子上でしか確認されなかった種を指す。

調査の結果、毎回出現したのは28種、格子上だけで確認された種は24種であった。

■底生生物・底質調査の結果(速報) ～潮間帯定量調査の結果～



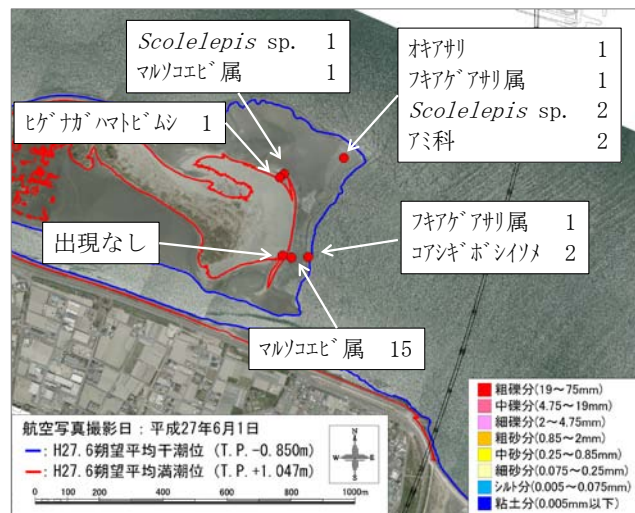
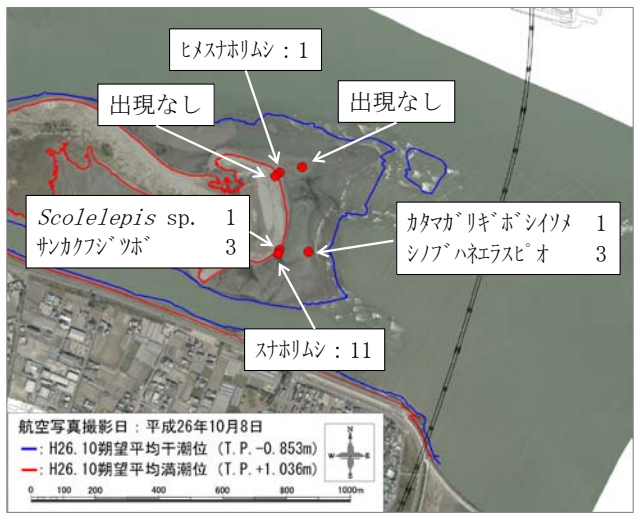
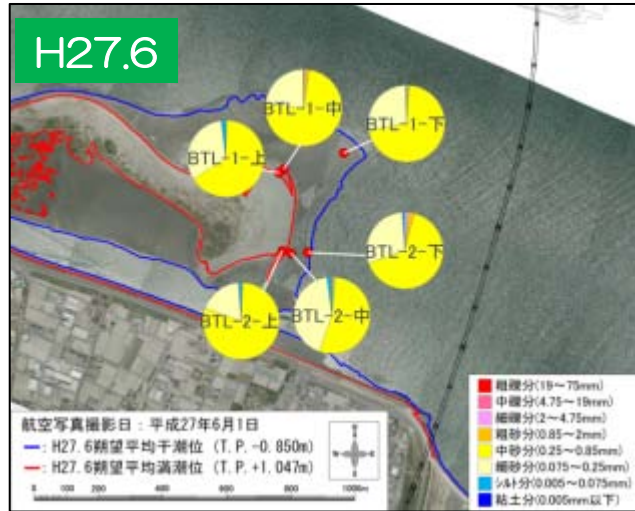
潮間帯定量調査の結果を以下に示す。

- ①底質は、主に砂質であることが確認された。
- ②全体的に底生動物は少なく、H27.6の調査では重要種であるフジノハナガイが確認された。

潮間帯定量調査の結果、河口干潟の東部は砂質で底生動物も少ない状況が確認された。
 またフジノハナガイが確認されており、付近の浅瀬でも確認されていることから河口干潟東部の浅瀬一帯に生息している可能性があると考えられる。



フジノハナガイ
 環境省：準絶滅危惧(NT)
 徳島県：指定なし



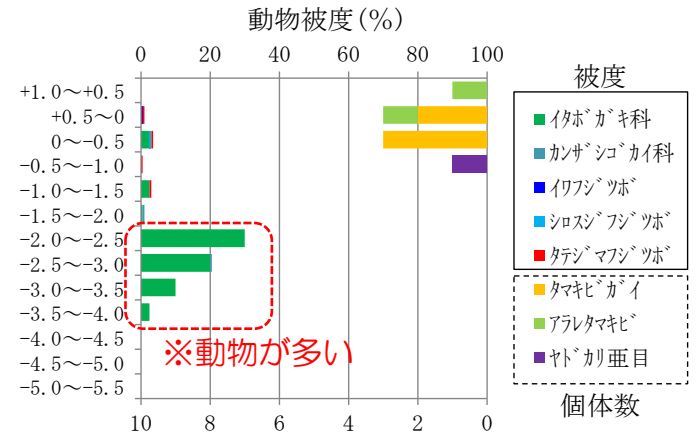
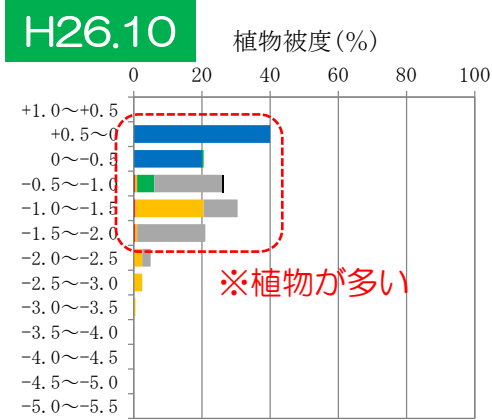
※フジノハナガイの確認場所は貴重種保護の観点より非表示

■底生生物・底質調査の結果(速報) ～付着生物調査(目視観測)の結果～



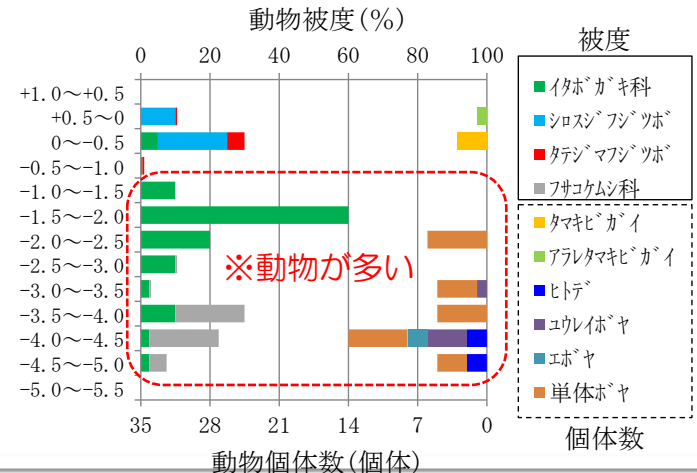
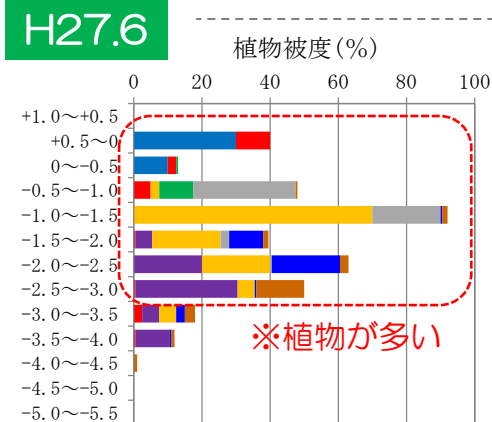
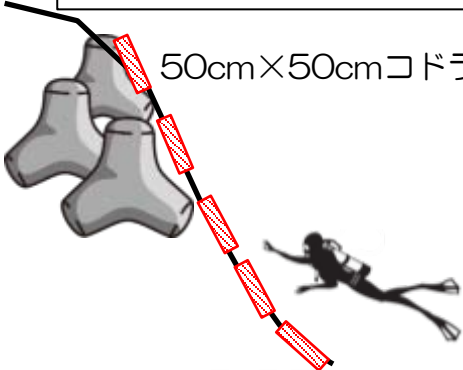
付着生物調査(目視観測)の結果を以下に示す。

- ①全34種の底生生物(植物20種、動物14種)が確認された。
- ②H26.10は、平均水面付近～T.P.-2.0m程度まで植物の被度が高く、2m以深では動物の被度が高かった。
- ③H27.6は平均水面～T.P.-3.0m程度まで植物の被度が高く、浅いところでシロスジフジツボ、平均水面～-3.0mはイタバガキ科と単体ホヤ、それより以深にフサコケムシ科の被度が高かった。



目視観察(ベルトトランセクト法)

50cm×50cmコドラート



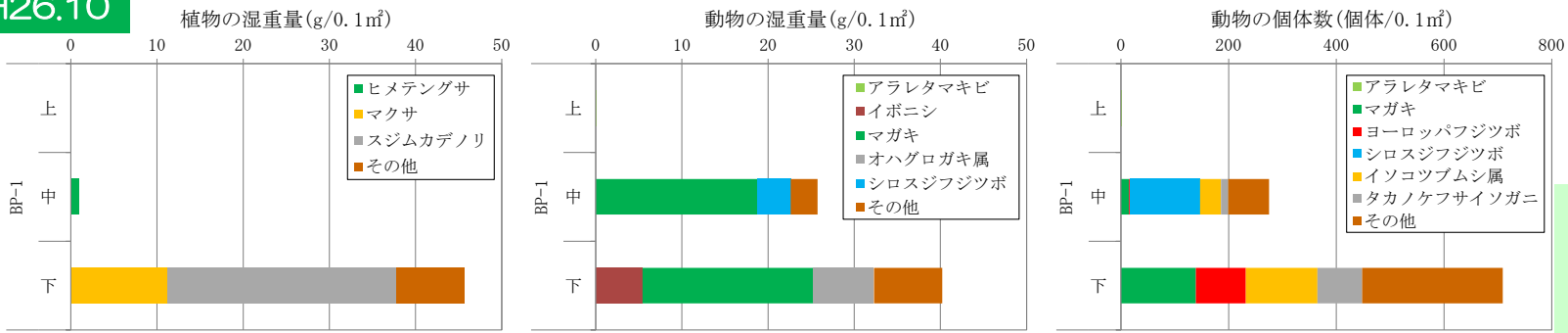
■底生生物・底質調査の結果(速報) ～付着生物調査の結果～



付着生物調査(坪刈り)の結果を以下に示す。

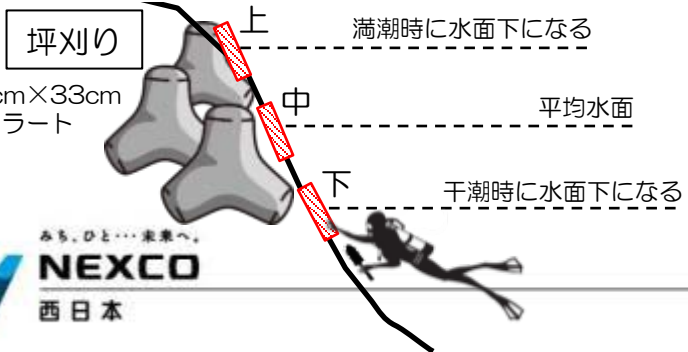
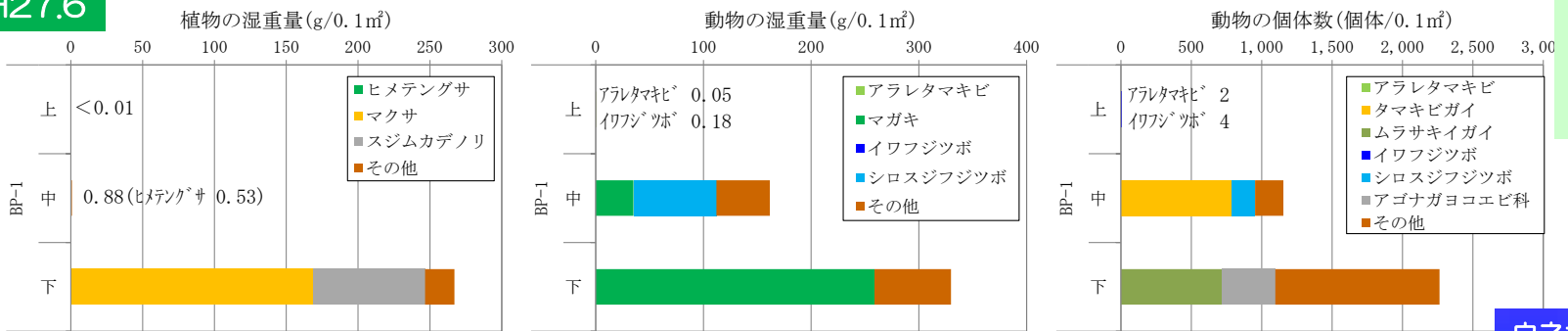
- ①全92種の底生生物(植物19種、動物73種、重要種はウネナシトマヤガイの1種)が確認された。
- ②H26.10は、平均水面付近～T.P.-2.0m程度まで植物の被度が高く、2m以深では動物の被度が高かった。

H26.10



調査の結果、植物は下部にスジムカデノリ、ヒメテングサ、マクサが多く出現した。動物は中部、下部にマガキやフジツボ類が主に出現した。

H27.6



ウネナシトマヤガイ
環境省：準絶滅危惧 (NT)
徳島県：指定なし

